

図画工作・美術への〔苦手意識〕解消の試みと成果 ―目指すべき造形美術教育を実現させるために―

降 旗 孝

(山形大学)

(平成27年10月1日受理)

要 旨

本研究の目的は、目指すべき図画工作・美術教育を実現するために美術への苦手意識を少しでも解消するためにはいかなる内容と要素が必要であるのか明らかにすることである。平成26年度4月当初での実態調査の結果では、小学校教員免許取得を希望する大学生の6割がなんらかの苦手意識を抱いていた。そこで、講義の中で苦手意識を減少させる試みを試行錯誤し実施してきた。1年後の最終講義時に再度調査を行い苦手意識の変容を調査した。調査結果から試みの成果と共に苦手意識を減少させる重要な要素を明らかにした。

キーワード：苦手意識、図画工作・美術、造形美術教育、教員免許状更新講習

I. はじめに 主題設定の理由と社会的背景

目指すべき造形美術教育を実現するためには、いくつかの障害となっている問題と課題が存在している。目に見える所では、図画工作科及び美術科の授業時間数が削減されて十分な学習時間が確保されていない。また、授業に使う設備や備品などの不足や教材や材料に使う予算の制限などもあるだろう。

また、近年の学力低下問題を受けて実施されてきた全国学力調査の影響で、対象の教科は益々重視され、その反対に対象でない表現教科等が軽視されるという目に見えない問題も存在している。ここでは、教育制度に絡んだ法的な問題というよりも現実の実質的な問題に目を向けて、まずはそこから取り組むべきであると考えた。

それは、教員免許状の取得を希望する大学生の中でも、中学校・高等学校の美術教員を目指す美術科の学生においては、美術の専門教育を受けているのでそれほど問題視されないが、小学校教員を目指す一般の大学生の多くには、図画工作・美術に対する苦手意識の問題が存在していた。¹

この苦手意識の問題は、問題視するほどではないと除外するほど軽いものではない。

それは、図画工作科の専科教員をおかない一般的な小学校では、学級担任の教師が国語や算数と共に図画工作をも必ず教える立場にあることを考えると、図画工作に対する苦手意識があることが教職を目指す大学生の大きな不安要素になっていたからである。

つまり、図画工作に対して苦手意識を抱いた小学校教師が、児童に図画工作を教える場面を想像してみると、十分な指導ができないばかりか、自分自身が受けてきた教育を繰り返すことを通して教師と同じ苦手意識を児童たちにも植え付けてしまう大きな危険性を孕んでいるからである。苦手意識は、教育のあり方をも左右するのである。

本来、学習指導要領に示された目指すべき図画工作教育や美術教育の実践が行われていれば、児童・生徒の〔苦手意識〕などは生まれ得ないと考えている。

なぜならば、学習指導要領に示されている教科目標は、小学校の図画工作については「表現及び鑑賞の活動を通して、感性を働かせながら、つくりだす喜びを味わうようにするとともに、造形的な創造活動の基礎的な能力を培い、豊かな情操を養う。」²⁾であり、どこにもうまく上手な作品づくりを目指すとは明記されていない。

「表現及び鑑賞の幅広い活動を通して、美術の創造的な喜びを味わい美術を愛好する心情を育てるとともに、感性を豊かにし、美術の基礎的な能力を伸ばし、美術文化についての理解を深め、豊かな情操を養う。」³⁾

このように中学校美術科の教科目標においても小学校の図画工作と同様である。

学習指導要領に示された図画工作・美術の教科目標は、苦手意識が生まれる土壌となるような作品の完成度の高さや精巧さ、つまり作品のうまさや上手さだけを求める教科ではない。それよりも一人一人の児童・生徒が自分の思いやイメージを試行錯誤しながら表現する過程にこそ、大きな教育的意義が存在するのである。

つまり、本研究対象である苦手意識の問題は、生まれつきセンスがあるとかないとか、得意・不得意とか、器用・不器用だとか個人的なレベルの問題ではなく、実は図画工作や美術の教育の在り方そのものの問題なのである。

そのことから、図画工作科・美術科において学習指導要領にも示された目指すべき造形美術教育を実現させるためには、苦手意識の存在は大きな弊害要因であり、苦手意識そのものが生まれ得ないような教育を目指す必要があるだろう。

昨年度の実態調査の結果から、図画工作・美術に対しては嫌いというよりも好きな教科であるという好意的な結果がでた。またその学習に対してもかなり意欲的に取り組んでいるという実態がわかった。しかしながら、その中で意欲があまりないと応えた児童・生徒の理由を見ると、そこには必ず苦手意識の存在があったのである。苦手意識があることで学習そのものへの意欲が減退していることがわかった。ここからは、図画工作教育や美術教育において期待する学習効果は得られないだろうし、求めるべき児童・生徒の豊かな表現も生まれ得ないと考える。故に、他教科以上に児童・生徒の苦手意識の問題はこの教科にとって重要であると思われる。

この図画工作・美術への苦手意識の問題が極めて深刻で重要な事は、教えられる子供側だけの問題でなく、当の教える立場である教師自身においてさえもこの美術への苦手意識を抱いている者は少なくないという現実がある。特に、美術の専門教育を受けていない小学校の教師の中にその傾向は顕著である。それは、毎年実施している教員免許状更新講習の実態調査結果などから明らかになった。⁴⁾

ここから、児童・生徒のみならず学校現場で、図画工作を教えている小学校教師においても苦手意識を抱いている実態がわかった。現在の我が国の造形美術教育の大きな問題点であると共に、目指すべき教育を実現するためには解決すべき重要問題なのである。

Ⅱ. 図画工作・美術に関する実態調査の実施と結果

1. 実態調査の概要

前述の苦手意識の存在は、毎年講義最初のガイダンス時に行っている実態調査アンケートによって理解していたが、改めてその存在を確認することにした。

苦手意識だけでなく現在の図画工作・美術に関する実態を把握するために、教員免許取得を希望する本学の大学生をはじめ、附属小学校と附属中学校の教員や一般公立中学校の美術教師、さらに2つの県立高等学校の芸術科目美術担当の教師の協力を得て、小学生から大学生までを対象にした本格的な実態調査を平成26年4月から6月にかけて行うことができた。⁵⁾

大学では、小学校教員養成の必修科目の教育実践（図画工作）2クラスと中学・高校の美術教員養成の必修科目の美術科教育法1クラス、幼稚園教諭養成の必修科目の保育（表現B）1クラスを受講する大学生の4クラス合計131名を対象に実施した。

小学校については、附属小学校の協力を得て4年生以上の小学生4年生・5年生・6年生合計271名の児童を対象に実態調査を実施することができた。

中学校については、附属中学校の全クラス、合計458名の生徒に実態調査を実施することができた。また、一般公立中学校の美術教師の協力を得て、公立中学校でも全クラス、合計530名の生徒にも同じ調査をすることができた。中学生は、合計で988名を対象に調査をすることができた。

大学生から小学生まで実態調査を行うことができたので、その間の高校生の実態も把握するために2つの県立高等学校の教師の協力を得て、芸術科目（美術）を選択する高校生合計216名にも調査を実施することができた。

最終的には、小学生から大学生まで合計1,608名の児童・生徒を対象に、図画工作と美術に関する実態調査を行うことができた。

その質問項目は、教科に対する意識調査として質問1では、好き嫌いを5択法できいている。教科に対する意欲については質問2で、意欲的に取り組んでいるか否かを5択法できいてみた。質問3は、質問2と関連して意欲がない場合には、その理由について記述法で聞いている。質問4は、苦手意識の有無について5択法で聞いている。質問5は、質問4と関連して苦手意識の有無それぞれの理由を記述法できいている。質問6は、楽しくて意欲の出る図画工作・美術はどのようなものか、自由記述できいている。

この実態調査の結果から、現在の図画工作と美術に関する現状を児童・生徒の視点から把握することができた。

2. 図画工作・美術に関する実態調査の結果

実態調査の結果としては、小学生から大学生まで図画工作や美術に対しての意欲については、小学生の8割を最高に、中学でも6割以上ということで、概ね意欲的に取り組んでいることがわかった。

ただ、図画工作・美術への苦手意識については、図1のグラフのように小学生段階では2割未滿で苦手意識は少ないが、中学生になると一気にそれが5割近くに増加するということ。それが、大学生になるとさらに増加して6割近くになることがわかった。

つまり、小学生から大学生まで、図画工作や美術の教科に対する意識や意欲については、全体的に肯定的な結果が明らかになったが、その結果に対して〔苦手意識〕については、予想以上に存在していることがわかった。⁶⁾

「調査結果から特に問題視するのは、児童・生徒が図工・美術に対して意欲があるにも関わらず多く存在していた〔苦手意識〕の問題である。意欲が低かった児童・生徒には確実に苦手意識の存在があった。造形美術教育をより良くするためには、この苦手意識の問題を少しでも解消させる必要がある。」⁷⁾

このことから児童・生徒に図画工作や美術科に対して意欲的に学習に取り組んでももらう為にも苦手意識をなくす努力をしなければならないと言えよう。

さらに、図画工作・美術への苦手意識は、教えられる側の児童・生徒だけでなく教える側の小学校教師自身にも存在していることがわかってきた。

それは、毎年実施される教員免許状更新講習を受講するベテラン教師との話や実態調査の結果から以下のことがわかっていく。

「一部の教師を除き教職経験豊富なベテラン教師でも苦手意識を抱きながら、日々図画工作の授業を担当している教師の存在が、かなり多いことが改めて再確認することができた。」⁸⁾

教師自身に苦手意識があることは、図画工作教育の在り方にも左右し大きな問題である。それは、苦手意識あること自体が教師の教育観を反映しているからである。作品のうまさを求める教育観の陰に、教師自身の苦手意識を生みだし、無意識の内に目の前の多くの児童にも同じ苦手意識を植え付けてしまっている。

3. 小学校教員を目指す大学生の苦手意識の実態

地域教育文化学部の大学生において図画工作・美術に対する苦手意識の存在そのものは、以前より周知してはいたが、平成26年度に本格的な実態調査を実施することで、その調査結果から、あらためてその存在を再確認することになってしまった。

しかしながら、教員免許を希望する大学生の中でも中学校や高等学校の美術教師を目指す造形芸術コースの学生には、この美術への苦手意識はそれほどない。わずかばかりいた少し苦手意識がある学生は、専門性の高い講義や実技演習の中で、他の仲間と比較して専門能力の違いや高度な表現能力の差を自覚することから生まれていた。

今回の調査結果から、特に問題視したのは、小学校の教員免許を取得し小学校教員を目指そうとしている大学生の苦手意識の割合が、予想以上にかなり高かったことである。

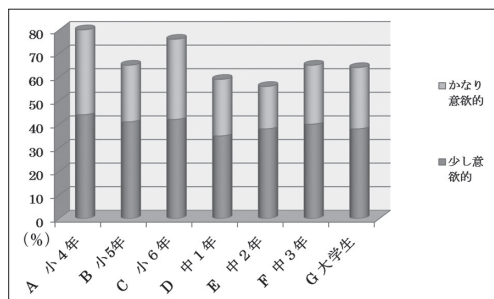


図1：苦手意識の実態 H26.4月当初

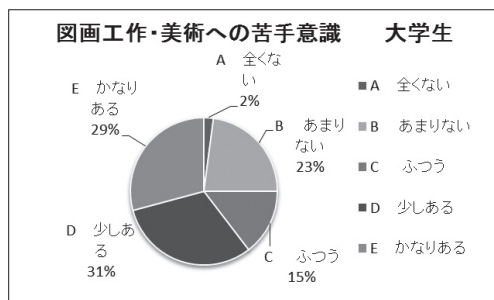


図2：H26.4月当初の苦手意識 大学生

図2のグラフ結果のように、苦手意識がかなりある小学校教員免許を希望する学生は29%で、少しある学生は31%で合計すると60%に及んだ。これは驚くべき結果だった。

単純に、個々の大学生における個人的なレベルの苦手意識の問題をはるかに越えて、受けてきた図画工作教育や美術教育そのものに問題がなかったのか、どのような教育であったのか、大いに疑問を投げかけさせられる調査の結果であった。

4. 図画工作・美術への〔苦手意識〕を抱く理由と原因

平成26年度の実態調査では、質問5において苦手意識がある人や反対に苦手意識がない人に、その理由を自由記述で聞いているが、この自由記述の分析から苦手意識を抱かせる原因と理由が明らかになってきた。

苦手意識のある人の理由で、一番多いのが、「うまく上手にできないから」「下手だから」「不器用だから」「思うようにできないから」などが圧倒的に多いことがわかる。

次に、「何をやったらいいのかわからないから」「アイディアや発想が乏しいから」などが続く。少数では、「面倒くさいから」などがあった。

逆に苦手意識がない人の理由では、圧倒的に多いのが「楽しいから」「面白いから」であり、中には「上手ではないけど、楽しいから」と前置きが付いて理由を書いている。苦手意識のある人にとって最大の理由となっていた「うまく上手であること」については、苦手意識がない者はそれほどこだわっていないことがわかる。

ここに、苦手意識を抱く者と抱かない者との大きな違いが存在する。苦手意識を抱かない児童・生徒と苦手意識を抱いている児童・生徒とでは、その理由について着目すべき質的な相違があることがわかった。

苦手意識を抱いている児童・生徒は、「うまく上手にできないから」「下手だから」「不器用だから」等の理由が圧倒的に多く、ここから図画工作・美術に対して「うまく上手にしなければならない」という価値観や固定概念に強く縛られていることがわかる。

それに対して、苦手意識がない児童・生徒は、「得意だから」と書いている子も数名いたが、基本的に「うまく上手にできるから」というよりも「好きだから」「楽しいから」という理由の方が圧倒的に多かった。ここから、やはり造形表現が本来持っている楽しさを伝えて実感させる必要があることがわかる。

このことから、苦手意識を解消する試みの要素としては、まずうまく上手にこだわる精神的な呪縛から解放させてあげる必要があると考えた。この呪縛からの解放によって、表現活動に本来内包している楽しさや面白さを実感を持って体験できるものと考えた。

Ⅲ. 〔苦手意識〕を解消させるための工夫と試み

1. うまく上手につくらなければならないという呪縛からの開放—①

講義最初のガイダンス時に、大学生が受けてきた図画工作・美術教育について振り返ってもらっている。その20年間受けてきた教育と経験から、多くの大学生は、この図画工作・美術の教育が「うまく上手に作品を描いたり作ったりする教科」「うまい下手がとても気になる教科」というイメージや固定概念を強く持っている。

故に、苦手意識のある大学生の理由をみると、圧倒的に多いのが「下手だから」「うまく

上手にできないから」「不器用だから」である。そこには、図画工作や美術は、うまく上手に作品を描き作ることが目指すべき目標である。という意識がとても強く、その固定概念や価値観に精神的に強く縛られている状況を推測することができる。

現に、苦手意識のあった学生は、「自分は今まで図工・美術は、うまく上手に作品をつくらなければならないと思っていました。」と記述していた。

苦手意識を減少させるためには、今まで抱いていた「うまく上手に作品をつくらねばならない」という固定概念や価値観を変容させることが重要な要素の1つと考えた。

「うまく上手に作品を描きつくらねばならない」という呪縛から解放させるために、授業最初のガイダンス時の話から、学生達が抱えている固定概念の確認と共に、上手下手にこだわる精神的な呪縛から開放させる試みをスタートすることにした。

授業第1回目のガイダンスでは、この授業を通して大事にすべきこと注意すべきこと学ぶべきことを教師から生徒に伝える重要な機会である。そして、生徒がそれまでの学習経験で学んできたことや知見に対して確認の機会でもある。もし、それが正しい望ましいものであったなら、あらためてそれを認めることで自信を持たせ、さらに強化な学びにすることが可能であるし、また誤った知識や学びをしているのであれば、早い段階でそれを正しい方向に修正できる可能性がある。

しかしながら、大学生が20年間で築き上げられてきた固定概念は、そうたやすく変えられない。4月当初の講義最初のガイダンス時においてもそれがなかなか理解できずに半信半疑のような学生も見られた。その後の教育の繰り返しの積み重ねによって、少しずつでもその意識を変容させていく努力が求められる。

各題材を提案する導入段階や最後の作品鑑賞場面においても、この教科で大事なことは、作品をうまく上手に描き作ることではなく、それよりも大切なことがあることを確認し強調することである。さらに、個別指導や助言の際にもそれを徹底する必要がある。それらの具体的な指導の一貫性の徹底と積み重ねが重要であると考え実施してきた。

2. うまさよりも自分らしさ、自分の表現を重視させる意識改革②

苦手意識を減少させるためには、重要な要素の1つである「うまく上手な作品づくり」を目指して「上手下手にどうしてもこだわってしまう」呪縛から精神的に開放させることと同時に、「うまく上手に作品をつくること」よりも「一人一人自分らしい自分の表現」を目指すことの方が、はるかに重要であることをもう1つの重要な要素として、大学生に理解させて徹底させる必要があると考えた。

図画工作に関する教職の講義では、前期・後期ともに題材研究の内容を取り入れている。その題材研究についても単に作品づくりが目的ではなく、児童を対象にした教材研究としての教育的なねらいを考察することを目的に行っている。

その中で、前期の教育実践（図画工作）の講義では、苦手意識のある大学生が特に苦手とする絵画題材をあえて扱うことにした。さらに、絵画題材の中でも水彩絵の具を使うことにも抵抗感があるようなので、水彩絵の具の克服も兼ねて絵の具を使った絵画題材「本当に絵に描きたい風景」に取り組みさせてきた。

目標として、うまく上手ではなく自分らしい表現を目指すことを掲げた。

「子どもには子どもの世界があり、こどもたちが絵を描くというのは、絵を通して自己を

表現することであり、そのことによって創造力をのばして行こうという考え方である。』⁹⁾

熊本高工は、この考え方はチゼック以来の進歩的な美術教育家によって提唱され実践されてきた考え方であり、その当時から美術教育の主流になっていると述べている。

このことは、現在においても造形美術教育の本質とも言える重要なもので、一人一人の児童・生徒自身が絵を描きながら自分の表現を目指すことを通して、創造性を伸ばすことが大事であるとしている。

しかしながら、「自分らしい、自分の表現を目指しなさい」と言うのは簡単であるが、実は容易ではない。実際に大学生に投げかけてみると、直ぐに理解できる学生と、それが一体何であるのか理解できないでかなり悩んでいる学生の姿も見られた。

このことは、表現活動を通して自分自身と向き合い会い、表現の根源的なものを追究するという本当の表現の難しさに直面する場面でもあり、重要なプロセスである。故に学生には悩みながらも自分自身で自ら理解して解決してもらうように心がけた。

「この立場においては、物の形を正しく写すということはほとんど問題にされない。いかに画面に作者自身が、いきいきと個性的に表現されているか、ということが大切なのである。」¹⁰⁾

自分らしさや自分の表現を重視させるために、授業における目標として、自分らしい表現を目指すことであるとはっきりと明示してきた。さらに連続する授業では、毎回授業の最初に、必ずその目標を確認させる時間をとってきた。

平成26年度の試みでは、前述のように「自分らしさ」が一体何であるのかわからないという学生がいたので、この「自分らしさ」については、すぐに表現させるのではなく段階において表現に導く方策を考え工夫してきた。それが、その自分らしさの元となる表現したい思いやイメージを文章化して見える形で具現化する方法である。

平成27年度では、絵画表現の題材研究においては、この自分らしさの根拠が見える形で自分自身が毎回確認できるように、画用紙の裏に、自分が絵に表現したいものはどのような「思いやイメージ」なのか、簡単な文章で記入させてから表現させるようにした。

学生たちは、毎回表現し始める前には、画用紙の裏に書いた自分思いやイメージを確認してから取り組めるので、結果的には自分らしい表現を目指すことに繋がった。

個別指導や助言においてもそれを反映させ、最後の鑑賞段階の時にも、うまさではなく自分の表現を評価すべき鑑賞の観点とする必要がある。

3. 自分らしさの表現を実現する用具・材料の扱いとその特性の理解—③

苦手意識を減少させるための重要な要素として、作品の上手さでなく自分らしさの表現を目指しなさいと言っても、例えば、絵画題材において水彩絵の具の特性を身につけていないと、絵の具によって自分らしさを表現するには限界がある。

自分らしい表現を実現するためにもそれを支えるための用具や材料の扱いやその特性について理解する基礎・基本は、重要な要素の一つと考える。

特に、大学生の苦手意識が強い分野である絵画表現においては、パレットなどの基本的な用具の扱い方から、水彩絵の具の特性、混色そして重色等などの表現方法について、自分らしい表現のためにも体験を通して理解してもらうことが必要と考えてきた。

それは実際に取り組んでみると、水彩絵の具に関する基本的な知識や経験は、美術科で

はない大学生には、驚く程身についていないことがわかったからである。例えば、パレットには一部の絵の具しか出さず、混色も限られた色の数でペンキのような濃い濃度で絵の具をつくって使うというような場面が見られた。

これでは、いかに自分の表現したいイメージがあっても思うような着彩を行うことは難しいといえる。故に、自分らしさを表現するための知識・技能が必要になる。

ただ、ここで注意すべきは、この知識・技能の伝授が教育の主たる目標ではないということである。これは特に留意しなければいけない事項であろう。

「成長発達につれて自己表現に必要な技法・技術の克服についての欲求が起り、ここに広い意味での必要が起る。しかしこの指導は、子供の表現上の必要に応じて行うべきもので、予め用意された既成の技術の伝授を目標とすべきでない。そのようなことを不用意にやると学習の動力である衝動が衰え、表現意欲という本尊が後退してしまう。」¹¹⁾

ここに、材料や用具の知識や技能ありきの指導ではなくて、あくまでも自分自身の表現を助けるため実現するための知識や技能こそが必要であると考ええる。

児童・生徒一人一人が自分自身の表現を目指すことの美術教育の理念は、理想だけでなく表現技能と知識の面の補完とサポートがあってこそ、はじめて本当に実現できるものであろう。

4. 自分らしい表現を認め合い学び合える学習空間づくり④

無意識の内に、苦手意識そのものを相手に植え付けたり、逆に苦手意識を解消させるような重要な要素として、人的な学習環境を上げることができる。これは、小学校の低学年よりも学年が上がるにしたがい影響の度合いが高くなる重要な要素といえる。

現に、苦手意識が減少した理由で「グループ内の友人同士から表現途中や鑑賞会において、『うまい上手ではなく〇〇らしいね』と言って、自分の表現が認められ褒められたりすると、今までなかった自信のようなものが湧き、自分の作品に対する良さも気づき愛着が湧いたから」という記述があった。

苦手意識を減少させるための2番目の重要な要素である自分らしさの表現を求める教育とも合わせて、他者から自分の表現が認められ褒められることで、自信が湧くと共に苦手意識を減少させることがわかった。

自他の作品の鑑賞のあり方やその環境としての学習空間の質も4番目の重要な要素の1つと考える。

「美術教育においては、教師対個々の児童・生徒の間において営まれる教育作用ももとより重要であるが、児童・生徒相互間において行われる教育作用もこれに劣らず重要である。」¹²⁾

児童・生徒相互間において有効な教育作用がおきるような学習空間が求められるのである。そして、その学習空間を作り上げるために教師自身の役割も大きいと考える。

それは、この最後の4番目の重要な要素は、それまでのすべての要素が十分反映されているか否かが判明するからである。その意味でも最も重要な要素ともいえる。

単に、作品の上手さ完成度の高さで評価されるのではなく、一人一人の自分の表現が認められ、認められ評価される学習空間こそが大切である。その学習空間こそが、結果的には、温かいクラスの雰囲気をも醸し出し、お互いの作品の良さが理解されて認められるこ

とに繋がると考える。

Ⅳ.〔苦手意識〕解消のための試みの成果

平成26年度では、前期「教育実践（図画工作）」と後期「図画工作の基礎」の2つの講義を実施して、1年後の平成27年の1月に再度同じ大学生に実態調査を行って、大学生が抱いていた図画工作への苦手意識は解消したのか、あるいは少しでも減少させることができたのか、あるいはできなかったのか、試みの成果を調査した。

その結果については、図3のグラフのように、苦手意識が「全くない」という割合は2%から7%に増加し、「あまりない」という割合も23%から34%に増加した。「ふつう」も15%から20%になった。苦手意識が「少しある」という割合は31%で4月当初から変わりがなかったが、これは同じ学生というわけではなく、「苦手意識がかなりある」という割合が29%から4%に激減したところから、苦手意識が全体として、「かなりある」から「少しある」という軽減する方向に移行した結果であることがわかる。

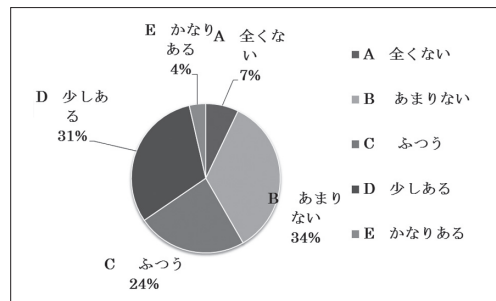


図3：1年後の苦手意識 H27.1月

大学生の約20年間に於いて少しずつ植えつけられてきた図画工作や美術への苦手意識も教育によって、完全には払拭できなくとも大幅に減少することを証明できた。

次に苦手意識の変容という視点で、実態調査の記述を見ると次の図4のグラフのような結果であった。もともと苦手意識がないと応えた大学生は19%であった。かなり苦手意識が減ったという学生は33%であり、少し減ったという学生は47%で合計すると全体の80%の学生には、講義を通して苦手意識を減少させることができた。

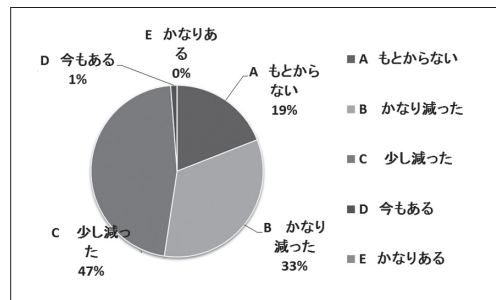


図4：苦手意識の変容について

これは、苦手意識の有無の調査で、あまりないという学生やふつうと応えた学生の中にも自分自身の苦手意識が減少したと自覚した学生も含まれていたことを示している。

逆に、苦手意識が増えたという学生は一人もいなかった。しかしながら、今もまだ苦手意識があるという学生が1人のみいた。

今も苦手意識がある1人の学生の存在も気になり無視できないので、その記述を読むと次のようにその理由を書いていた。

「作品を構想する段階では、自分らしいイメージや考えが浮かびました。しかし、いざ制作に取りかかると自分の中にある自分らしさを表現することがとても難しいことが分かりました。恐らく私が図画工作に対して苦手意識を持っている原因はそこにあると思います。最後の制作が1つの方法にこだわらず別の方法を考えることができ、苦手を改

善できる希望が見えたような気がします。」¹³⁾

この記述から、今も苦手意識があると応えた唯一1人の大学生も、かつてのように単純にうまく上手に描けなかったから苦手意識が残ったのではなく、講義において一貫した目標としていた自分の中の自分らしい表現を目指し、その難しさの壁にぶつかったことで苦手意識が残っていたことがわかった。これから先の希望も見えるコメントなので、少し安心することができた。

V. 「苦手意識」を減少させることができた理由

図画工作・美術に対する苦手意識が減少した学生は、いかなる理由で減らすことが可能になったのか、その理由の自由記述から考察した。

かなり苦手意識が減った学生の理由に着目すると、「自分らしく自分の表現したいようにできたから意識が変わったから」と理由を書いている学生が19名で1番多かった。

次に、苦手意識減少の理由として多かったのが「うまく、上手に作品を作ったり描いたりする必要がなかったから」が14名であった。

このことから、苦手意識を減少させるための第1の要素として考え試みてきた「うまく上手に作品をつくらねばならない」という呪縛から解放させることの必要性和有効性を改めて確認することができた。

そして、第1の要素と併行して「うまく上手に作り描かねばならない」という概念から、「うまくよりも自分らしい表現の方を重視する」という第2の要素である価値観・教育観に本質的に移行させる必要があることもあらためて確認することができた。

次に、苦手意識が減少した理由で多かったのが、「グループ同士や鑑賞会で、他の人に認められたり、褒められたこと」で自信がついて楽しくなったという学生が10名いた。

ここから、重要な要素1と要素2とも合わせて、グループ内やクラスの学習の雰囲気をも含めた学習空間の質の在り方、つまり重要な要素4の必要性和有効性を確認することができた。河村浩章も次のように人的環境を含めた学習環境の重要性を述べている。

「指導の第1に考えなければならないことは、児童が造形活動をするのに適した環境を作ることにある。」¹⁴⁾

以上のような苦手意識を減少させるための重要な要素が十分発揮されてきた所から、次のような「自分の作品の良さを感じることができるようになったから」とか「図工の楽しさや面白さがわかったから」という、苦手意識を減少させる理由として図工の楽しさや面白さを実感することができたという記述が生まれてきたともいえる。

しかし、中には「苦手意識はだいぶ減ったが、まだ上手な人の作品を見たりすると、自分の作品に対しての自信がなくなるので、もっと自信を持てるようになりたい。」と正直に本音を書いている学生もいた。

ここに、苦手意識を完全に払拭させることの難しさをも確認することができた。

授業研究に関するものでは、実際の授業をイメージしてもらい実践的に考察してもらうことを目的に、ビデオを使った授業研究を講義に必ず1回以上は取り入れてきた。この実際の授業を通して題材の提案から教師の関わりなどを理解してもらうねらいの元に、かなり力を入れて工夫してきたが、これに関する記述がないのが残念だった。

今回の研究でいえることは、図工・美術に対する苦手意識とその程度については、教育によって完全に払拭することはできなかったが、大幅に減少させることができるということである。その可能性を実証することができた。

逆に、何も働きかけをしなければ、教職の大学生は図画工作・美術への苦手意識を抱いたまま小学校教師になり、他教科と共に図画工作を教えながら、自分と同じ苦手意識を子ども達にも植えつけてしまう危険性を大いに孕んでいるということである。

その悪循環を断ち切るためにも教員養成段階において、今まで抱いてきた苦手意識を払拭し意識改革を実現し、教職に立った時には、目の前の子ども達に苦手意識ではなく表現や鑑賞の本当の楽しさや面白さを味わわせることができる教師の資質と能力を身につけて欲しいと強く願うものである。

VI. 本研究における成果と今後の課題

今回の研究の成果は、約20年間で植え付けられてきた大学生の図画工作や美術への苦手意識も教育によって、完全に払拭することはできなくとも大幅に減少させる可能性を明らかにできたことである。このことは、単純に個々の大学生の苦手意識の有無やその程度の問題ではなく、大学生自身が目指すべき図画工作教育の本質について、一歩近づき理解したこととの証ととらえている。結果的には、学生自身の抱いていた図画工作教育の教育観が偏ったものから目指すべきより良い方向に変革を迎えたことをも意味している。

今後の課題としては、大学生が抱いていた苦手意識を減少させた理由の考察から導き出されてきた重要な4つの要素を通して、苦手意識を解消するために有効な具体的な教育内容、いわば教育コンテンツを開発し、具体化することである。

この具体的な教育コンテンツによって、教員養成の大学講義内容をさらに充実させることが可能になり、学校現場の新任教師やベテラン教師たちの免許更新講習や研修の際の教育実践検証のための資料として活用させることができると期待する。

現在の造形美術教育を実質的により良くするために、今まであまり積極的に目を向けられてこなかった多くの人々が抱いている図工・美術に対する苦手意識にあえて着目してきた。そして研究を重ねる度に、苦手意識の解消より最終的には苦手意識そのものが生まれ得ない造形美術教育を実現することが重要であると確信するようになってきた。

つまり、子供たちに苦手意識が生まれない教育の実現を目指すことは、結果的には、この教科のあるべき本当の教育を目指すことでもある。

図画工作・美術教育の本質ともいえる児童・生徒の一人一人の表現が生まれることを目標にし、お互いにそれを認め合えるような学習空間の形成とその学習経験を重ねること、この教科の本質実現の蓄積によって、最終的には、児童・生徒の内面には苦手意識などというマイナス的な傾向は生まれ得ないし、教育そのものが質的に改善し目指すべき造形美術教育が実現すると考えるのである。

なお本研究は、平成26年～平成28年度科学研究費補助金 基盤研究 (C)「子ども達に苦手意識を抱かせない図画工作・美術における教育コンテンツの研究・開発」(研究課題番号 26381173) の研究成果の一部である。

註、引用文献一覧

- 1 降旗 孝、「実践的教育方法改善の視点－造形美術教育における現状と課題－」、山形大学教育実践研究第10号、2001
この研究では、教育学部の大学生を対象にして、小学校時代の図画工作教育と中学校時代の美術教育について、その認識と経験の実態を調査をしており、その調査結果から考察している。
- 2 文部科学省「小学校学習指導要領解説図画工作編」平成20年 8 月、p.6
- 3 文部科学省「中学校学習指導要領解説美術編」平成20年 9 月、p.6
- 4 降旗 孝、「学校現場における図画工作教育の課題－教員免許状更新講習の実施・考察から－」『美術教育学』、美術科教育学会誌第32号、2011、p.399
この研究では、本格実施された教員免許更新講習を受講した学校現場のベテラン教師を対象に、図画工作の指導とその研修経験についての実態調査を行った。その調査結果から考察したものである。
- 5 平成26年度 4 月から 6 月かけて、山形大学附属小学校と附属中学校の教諭、一般公立中学校の美術教師、県立高等学校の 2 校の美術教師の協力を得て、小学生から大学生までの大規模な実態調査を行うことができた。
- 6 降旗 孝、「図画工作・美術への〔意欲〕・〔苦手意識〕の実態と考察－児童・生徒・大学生の実態調査結果から－」、山形大学紀要（教育科学）第16巻第 2 号、2015
- 7 降旗 孝、前掲書、第16巻第 2 号、2015、p.53
- 8 降旗 孝、「学校現場における図画工作教育の課題－教員免許状更新講習の実施・考察から－」、美術科教育学会誌『美術教育学』第32号、2011、p.399
- 9 熊本高工、「教師のための図画工作」、河出書房、1950、p.58
- 10 熊本高工、前掲書、1950、p.59
- 11 山形寛、「美術教育概論」、宝文館版、1958、p.114
- 12 山形寛、前掲書、1958、p.180
- 13 1 年後の後期最終日の講義で行った調査で、4 月当初からの自分自身の苦手意識の変容について 5 択法で応えてもらい、さらにその理由について自由記述している。
その中で、今も苦手意識があると応えた 1 人の男子学生の記述から
- 14 河村浩章、「美術教育における指導とは何か」、美育文化協会編 『美術教育のすべて』造形社、1971、p.115

Summary

Furihata Takashi

Attempts and Achievements of Eliminating The weak awareness of Art — In order to achieve the ideal Art Education —

The purpose of this study is, to clarify the contents and elements for realizing the ideal art education without the weak awareness of art. From the results of the survey in the 2014 fiscal year in April initially, 60 percent of college students who wish to elementary school teacher license acquisition had been holding a weak awareness of art representation. So, I've been doing trial and error carried out an attempt to reduce the weak awareness of art in the lecture. To investigate the transformation of weak awareness, surveyed again during the final lecture after one year.

It revealed the important elements to reduce the weak awareness of art.